

二十四輩順拝図會

积了貞著。享和三（1803年）（河内屋太助刊。序に親鸞の御旧跡二十四輩の来由を審らかにするとある。なお同名の書で戸隠山の記述のない書もある。

二十四輩順拜圖會卷之五

信濃國 しなののくに 越後より信濃へ至るに関川と墅尻との間に國界の のじり

川あり

右の方に黒姫飯綱戸隠の嶺聳へて見ゆ くろひめいひつなとかくし みねそび

○戸隠山ハ越後に隣り黒姫山に並べり祭る御神 とがくしさん とな なら

ハ手力雄ノ命なり日の神天石屈に籠らせ給ふ たちからを みこと あまのいはと こも

時常夜の國と成りしかバもろくの神達磬戸 とこよ とこよ かんだちいはと

の前に集り神楽を奏し常夜のながなき鶏をう あつま かぐら そう とこよ とり

たハせ給ひけれバ日の神磬戸を細く明給ひ其 いはと ほそ あけ

神楽をみそなわし在すをかねて戸脇にかくれ ましま とわき

ましまする手力雄の神磬戸を引放ちて空さま たちからを いはと はな そら

に抛給ひ日の神の御手を取て引出し奉る其抛 なげ

給へる磬戸此山に落止りしと即是を戸隠山と いはと おちとま すなはち とかくしさん

いへるとなん此山頭さんとうに洞穴とうけつあり内に九頭龍権くづりやうごん
げんましま 現在して此山を鎮護し給ふ立願りうぐわんせる者ハ必ずかなら
とうちう なし み さゝ 此洞中へ梨の実を捧げ奉れば忽ち應驗をうげん有て祈き
ねん 念ずる事こと悉く成就じやうじゆすといひ傳つたへたり訳わけて口中
のなやみ齒の痛みに苦しむ者ハ遠き國を隔へだてし
いっしやうがいなし たちもの も一生涯梨を断物とし此戸隠山九頭龍権現を
念じ奉れば靈驗れいげん非ずといふ事なし誠まことに異靈いれいの
御神也

○墅尻のじりの里こすいに湖水あり其流れ越後ノ國へながれ今
はまべ 町の濱辺にて海に入れり此川を関川せきかわといへり
すはこ 此湖水も當國諏訪湖と同じ氷の張つめたる其
むまくるま 上を馬車も心よく往来せり諏訪の湖ハ寒中かんちゆうに
こほ 氷れども此湖水ハそれには異変ことかはり嚴寒げんかんの時ハ
なみたか 水あらく浪高くして氷結むすバす早春さうしゆんに至りては
こちゆう じめて氷れり湖中に嶋有弁才天べんざいてんを鎮座ちんざせり

(二頁にわたり山の絵図と文。絵図中にあみだが嶽

小原

の名称あり。文は次の如し)

とがくしさん
戸隠山

とがくしさん もう みなみをもて とうさん だいもんにわうもん すぐ
戸隠山に詣ずるニハ南面より登山し大門二王門を過れば
きせきくわいがんこけ せうさん たいこしゆさゆう を しげ
奇石怪岩苔なめらかにして松杖の大古樹左右に生ひ繁り日
かげ このあいたみち ほとり じんか みないた をく
の蔭をもらす事なし此間道の傍に人家あり皆板を以て屋
しやう をほ ほくめん せいか とき なをゆき せうふ
上を蓋へり山の北面には盛夏の時といへ共猶雪深く樵夫も
こころよ のぼ この きた したんれい あみだ みね せう
快く登る事を得ず此山の北に俊嶺あり阿弥陀が峯と称す
さんちう とが はんも かうそ ここ とうさん なか
山中すべて榎の大木繁茂せり高祖聖人爰に登山ましく中
ぎやうせうぼう しぼら とくま ぞん み だぶつ かんとく すなはちふで
の院行照坊に暫く止り給ひ三尊の弥陀仏を感得有て即筆
そめ そのそんゑい うつ なをとうざん じうもつ
を染られ其尊影を写し給ひ今も猶當山の什物たり又聖人
とがくし
戸隠山よりおぼろなる月のさしのぼりたるを御覧じ詠じ給
ふ御哥あり うた
へ戸がくしの すぎま 杉間に月の うつらふハ 心の玉を みが
けとぞ思ふ

(次頁は大雑把な奥院の絵。絵中の名称読み難し。)

註 「新日本古典籍総合データベース」で「二十四輩

順拝圖會」(DOI 10.20730/100145362) 249コマか

ら251コマ。 早稲田大学図書館の「古典籍総合データベース」の「二十四輩順拝図会 信濃上野五」の2、3、4、5コマ目。なお、NPO長野県図書館等協働機構。信州地域史料アーカイブに
画像・翻刻・現代語訳がある。